コント『副業』

●登場人物
・鈴木（後輩）：男
・新垣（先輩）：男
・佐藤：女

早朝の会社に鈴木が出社してくる。

鈴木：「おはようございま～す。」
新垣：（つけていたイヤホンを外しながら）「おう、おはよう。」
鈴木：「えっ、先輩今日早いっすね。僕が一番かと思ってました。」
新垣：「ちょっと、やんなきゃいけないことあってさ。」
鈴木：「先輩、そんな仕事あったんですね。」
新垣：「あのさ、良かったら手伝ってもらっていい？」
鈴木：「え？まぁ、良いっすよ。」
新垣：「良い？助かるわ～。」

鈴木、鞄を自分のデスクに置いて、新垣のデスクに向かう。
新垣、自分のデスクのモニターで何かの映像を観ている。

鈴木：（新垣のモニターを見て）「え？先輩、何観てるんですか？」
新垣：「うん？AV。」
鈴木：「は？AV！？え？なんで？なんであさイチで出社してAV観てるんですか？
　え、仕事は？」
新垣：「これが仕事だよ？」
鈴木：「仕事？これが？え、どういうこと？てか、AV観るのを手伝ってってなんすか？
　俺、なんか今からめっちゃ気持ち悪いことさせられます？」
新垣：「あっ、ごめんごめん。説明不足だったわ。仕事って言っても、これ俺の副業ね。」
鈴木：「副業？」
新垣：「そう。AVに正しくモザイクが入っているかチェックをする仕事。」
鈴木：「いや、副業ならもっと他に良いのあるでしょ。なんでこんなことしてんですか？」
新垣：「こんなことってなんだお前！AVが適切に人のもとに届くための大切な仕事だぞ！
　正直、稼ぎもそんなに良くないよ。でも、俺がやらなきゃダメなんだよ！」
鈴木：「いや、もう本業の熱量じゃないですか。普通、副業って稼ぐためにやりません？」

新垣：「稼ぎなんてどうでもいいんだよ。AVが正しく行き渡るための手伝いがしたい！
あと、未発売のAVを誰よりも先に見たい！」
鈴木：「最後のが本心でしょ。絶対、それが一番の理由だろ。熱く語ってごまかしてたけど。
いや、でも別に会社でやらなくても良くないですか？」
新垣：「そうなんだけど、これ今日中に確認しなぁいけなくてさ。それにあさイチの会社
だと社内でAVを観てるっていう背徳感も相まって一番、集中できるんだよ。』
鈴木：「気持ち悪っ。変態すぎるだろ。てか、副業なら俺、手伝わないっすよ？」
新垣：「そんなこと言うなよ〜。お前もAV好きだろ？」
鈴木：「そんな別に先輩ほど、好きじゃないですよ。」
新垣：「じゃあ、今日の昼飯、おごるからさ。頼むよ！」
鈴木：「う〜ん…。わかりました。手伝いますよ。」
新垣：「サンキュー！あ、うちの会社、副業禁止だからさ、これ絶対誰にも言うなよ？」
鈴木：「先輩が副業でAVのチェックしてるなんて、言えるわけないでしょ。」

新垣、イヤホンの片方を鈴木に差し出す。
鈴木、新垣から差し出されたイヤホンを付ける。
新垣：「じゃあ、再生するぞ。」
鈴木・新垣、数秒間、モニターを見つめている。
鈴木：「え、てか。これ、モザイクのチェックなんですよね？」
新垣：「そうだよ。」
鈴木：「じゃあ、脱いでるあたりまで早送りすればよくないですか？なんで最初から
観るんですか？時間ないんですよね？」
新垣：「いや、チェック見逃しちゃだめだからさ。それに、俺、AV観るときは基本、
早送りしないから。インタビューとかも絶対ちゃんと観るから。」
鈴木：「朝から先輩のAVへのこだわり、あんま聞きたくないなぁ…。」
鈴木：（新垣と一緒に繋いでるイヤホンを指さしながら）
「あと、このイヤホンの聴き方、めっちゃ嫌だ。これカップルとかがやるやつ
でしょ？朝の会社で良い歳の男二人がAV観ながら、この聴き方してるのはたから
見たら気持ち悪すぎるって。僕、これ始めてやるのに理想のシチュエーションと
違いすぎて、めっちゃ嫌ですわ。僕、音聴かないで観るんで大丈夫です。」

鈴木イヤホンの片方を先輩に返す。
新垣：（鈴木が返すイヤホンを受け取りながら）「あ、そう？」

新垣、再びモニターに集中する。
鈴木：（モニターから目を離し、キョロキョロとあたりを見渡しながら）

「てか、誰か来ないっすかね…。先輩と二人で会社で朝からAV観てるところ
なんて誰かに見られたらどう説明すれば良いかわかんないですよ…。」

新垣がモニターを凝視しながら、何かに気が付く。
新垣：「…え？え？ちょっと待って…。」
鈴木：「どうしました？」
新垣：「この出演してる女の人、経理部の佐藤さんじゃない？」
鈴木：「え！？」

鈴木、モニターを覗き込んで確認すると、様子がおかしくなりはじめる。
鈴木：「いや、さすがに違うでしょ！？てか、顔隠れてるのになんで佐藤さんって
わかるんですか？」
新垣：「首元にあるこのほくろ、佐藤さんにもあるもん。それに声もよく聞いたら佐藤さん
に似てるし！！」
鈴木：「いや～、人違いだと思いますけどね…。」
新垣：「いや、絶対そう！！俺の目に間違いはない！これ絶対佐藤さんだわ。てことは、
え、待って、俺これから佐藤さんのAV観れるってこと！？やばくない！？」
鈴木：「いや…。先輩、これ観るのやめた方が良いんじゃないですかね？」
新垣：「え、なんで？」
鈴木：「いや、なんか同僚のそういうのあんま観たくないっていうか…。」
新垣：「え、お前なんかカッコつけてる？なにその感じ。同僚だからこそ観たいだろ！
しかも、幸運なことに会社でこれを観れるという奇跡！てか、そもそもこれ
仕事だから！確認しなきゃダメなんだよ。」
鈴木：「いやぁ…。」

そこに佐藤が出社してくる。
佐藤：「おはようございます。」
鈴木：（驚きながら）「うわぁ、おはようございます！」
新垣：「ほら、首元のほくろの位置全く一緒じゃん！」
鈴木：（新垣の口を押さえながら）「ちょ、バカ！！何言ってんすか！？」
佐藤：「え？ほくろ？…どうかしました？」
鈴木：「いえいえ！なにも！なんでもないです！！それにしても佐藤さん、
今日やけに早いですね！？」
佐藤：「はい、月末なので、諸々の締め作業が残ってしまっていて、今日中に
片付けなければいけなくて。」
鈴木：「なるほど…。」

佐藤：「あ、そういえば、新垣さん、昨日提出していた経費精算の申請書、間違っているところがたくさんあったので、急ぎ直して提出してもらっていいですか？」
新垣：「え、マジすか？すいません。急ぎ直します。」
佐藤：「よろしくお願いしますね。」

佐藤、鈴木・新垣とは少し離れた自分のデスクに向かう。
鈴木：「あぶねぇ…。じゃあ、先輩は今言われた経費精算の申請書の直し作業あると思うんで、このAVの続きは僕がチェックしておきますね。」
新垣：「ちょちょちょ、なんでそうなるんだよ？」
鈴木：「いや、先輩忙しそうなんで。」
新垣：「さっき観たくないって言ってたじゃん。大丈夫だよ。僕自分でやるよ。」
鈴木：「いや、先輩、マジで無理すんの良くないっすよ。僕、全然やるんで。」
新垣：「え、なんで急にそんな前のめりになってんの？」
鈴木：「別にそんなことないっすけど。」
新垣：「いや、なってるだろ。え、なんかお前、佐藤さんのAV一人で楽しもうとしてない？」
鈴木：「一人で楽しむ？何言ってんすか先輩。これ「仕事」ですよ。楽しむもなにもないでしょ。」
新垣：「なんだお前！さっきモザイクチェックのこと「こんなこと」って言ってただろ！」
鈴木：「先輩の熱意に心動かされて僕も心を改めたんです。」
新垣：「嘘つけよ！佐藤さんが出てるからだろ！佐藤さんが出てるってわかってから、なんか変だもん！お前！」
鈴木：「そんなことないですよ。佐藤さんも申請書、急ぎ出し直してほしいって言ってたじゃないですか。僕は、佐藤さんが困るだろうから、早く直し作業やった方が良いですよって言ってるんですよ。それに、このAVのチェックも今日中に終わらせなきゃダメなんですよね？僕は、先輩と佐藤さん、両方の力になりたいだけです。」
新垣：「いや、それはそうだけど…。でも、お前さっき同僚のそういうの見たくないって言ってただろ。無理すんなって。俺がやるから！」
鈴木：「いや、僕はこれ、佐藤さんだと思ってないんで。僕の中では同僚じゃないんで。」
新垣：「いやいやいや、さっきお前も首のほくろ見ただろ！声もそうだし、絶対佐藤さんだって！」
鈴木：「いや、絶対、違いますよ。やっぱ、佐藤さんがAV出るわけないんで。」
新垣：「絶対、佐藤さん！てか、お前、そもそも副業だったら手伝わないって言ってただろ！いいよ！やっぱり手伝わなくて！お前には関係ないから！俺一人でやるから！」
鈴木：「いや、それはダメです。そんなに忙しい先輩を放っておけないので。」
新垣：「なんでだよ！お前さっきとスタンス変わりすぎだろ！急に良い後輩すぎるって！」
鈴木：「昼飯も奢ってほしいし。むしろ、それが目的なんで。」

新垣：「嘘つけって！絶対、佐藤さんのAV観るのが目的だろ！」
鈴木：「いや、だからこれ佐藤さんじゃないんで。」
新垣：「はぁ？じゃあ、そんなに言うなら、もう本人に確認しよう。」
鈴木：（焦りながら）「それは絶対ダメです！」
新垣：「なんでだよ？」
鈴木：「いや、佐藤さんの気持ちを考えてみてくださいよ。普通にAV出ました？なんて聞かれたくないんじゃないですか？月末だし。」
新垣：「別に月末関係ないだろ。てか、そもそもお前はこれ佐藤さんだと思ってないんだろ？じゃあ、別に良いだろ。違ってたら、俺がちゃんと誠心誠意謝るから。」
鈴木：「良くないですよ！だって、佐藤さんに直接聞くってことは、先輩が副業してることを佐藤さんに話すってことですよね！それでもし先輩が副業してるって、会社にバレたら、先輩と一緒に働けなるかもしれないじゃないですか！僕嫌ですよ！」
新垣：「お前、そんな良い奴じゃないだろ！」
鈴木：「ひどっ！こんなに先輩のためを思ってるのに！」
新垣：「さっきからなんか嘘くさいんだよ！たしかに、佐藤さんに副業のこと話すことになるけど、誰にも言わないでって本気でお願いしたら、佐藤さんも言わないでくれるだろうし。」
鈴木：「そんなのわかんないじゃないですか？だって月末ですよ？」
新垣：「お前にとっての月末ってなんなんだよ！とりあえず、俺は聞きに行く！」
鈴木：（佐藤のデスクに向かう新垣を止めながら）「ちょっと…！」

新垣、鈴木の静止に構わず佐藤のデスクに向かう。
新垣：「佐藤さん、ちょっと質問があるんですけど。今、時間大丈夫ですか？」
佐藤：「はい、経費申請書の件ですか？」
新垣：「いや、それとは関係ないんですけど…。あの…。違ったら本当に申し訳ないんですけど、佐藤さん、最近、AV出ました？」
佐藤：（ドキッとしながら）「は？」
新垣：「…いや、あの実は僕、副業でAVのモザイクチェックをする仕事をしていまして、あ、うちの会社副業禁止なのは知ってるんですけど。で、今朝、AVのチェックをしていたら、その首元のほくろとか、声とか佐藤さんにそっくりな女性が出ていて、もしかしたらと思って…。違ったら本当に申し訳ないんですけど。」
佐藤：「…あの、その映像見せてもらっても良いですか？」
新垣：「え？あ、はい。」

新垣・佐藤、新垣のデスクに向かう。

新垣：（モニターを指さしながら）「これなんですけど…。」

新垣・佐藤・鈴木の3人でモニターを観ている。

佐藤：（しばらくしてから）「これ…、私の妹ですね。」

新垣：「妹？」

鈴木、驚きながら佐藤の方を見る

佐藤：「すみません…。私も戸惑っているんですけど…。私、双子の妹がいて、これ多分、妹だと思います。」

新垣：「え、佐藤さん、双子でしたっけ？」

佐藤：「はい、言ったことなかったんですけど。」

新垣：「え、でも、前の飲み会で一人っ子って言ってませんでしたっけ？」

佐藤：「あれ、嘘です。本当は双子です。」

新垣：「嘘？え、なんでそんな嘘ついたんですか？」

佐藤：「いや、なんとなくの気分で。すみません。」

新垣：「気分で嘘つくんですか？変なの。」

佐藤：「そうなんです。私、変なんですよ。」

新垣：「いやいや、さすがに嘘ですよね？」

佐藤：「嘘なんてついてないですよ。私、嘘ついたことないんで。」

新垣：「いや、今さっき、一人っ子っていうのは嘘って言ってたじゃないですか。」

佐藤：「あれはボケです。本当は双子なのに、一人っ子っていうボケです。」

新垣：「ボケだとしたら、全然面白くないですよ。面白くないボケは、ただの嘘ですよ。」

佐藤：「すみません、お笑いとかよくわからなくて、慣れないことしてしまいました。」

新垣：「いやでも…。」

鈴木：（新垣を遮りながら）「もういいじゃないですか！ねぇ！佐藤さんが双子の妹って言ってるんだからそうなんですよ！佐藤さんは双子なんですよ！」

新垣：「いやぁ、そんなことある？百歩譲って、本当に双子だったとしてもほくろの位置まで一緒って。もうそれクローンじゃん。」

鈴木：「あるんですよ！」

新垣：（納得いっていない様子）「いやぁ…。」

佐藤：「あの、ちなみにこの映像、この後、新垣さんが観るんですか？」

新垣：「そうですね。モザイクのチェックをする仕事なんで。」

佐藤：「それって私がチェックするっていうのはダメなんですかね？」

新垣：「は？」

佐藤：「いや、その自分の妹が出ているものなので、あまり同僚とかに観られたくないというか…。私の眼で確認してあげたいというか…。」

新垣：「いや、姉に見られる方が嫌じゃないですかね？。しかも、これ今日中に
確認しなきゃいけないんですよ。佐藤さん、今日、月末の締め作業で忙しくて、
そんな時間ないんじゃないすか？」
佐藤：「あぁ、そうなんですか…。」
新垣：「はい。」
佐藤：「じゃあ、鈴木さんが確認するのはどうですか？」
新垣：「え？いや、鈴木も同僚だから、別に僕が確認するのと変わんなくないですか？」
佐藤：「いや、なんか新垣さんには観られたくないというか…。」
新垣：「なんで！？てか、これ妹さんなんですよね？妹さんも多分色んな人に見られること
をわかって出てると思うので、そこは気を遣わなくても良いんじゃないですか？」
佐藤：「いや、でも、妹が新垣さんには絶対見られたくないって言ってるので…。」
新垣：「どういうこと？なんで妹さんの気持ちを佐藤さんがわかるんですか？
もうそれテレパシーじゃん。」
佐藤：「そうなんですよ。私たちテレパシー使えるんですよ。」
新垣：「それはもうさすがに嘘すぎるって！」
佐藤：「それに、佐藤さんには今日中に、申請書の修正をしてもらわないといけないので。」
新垣：「それはこの後、すぐに終わらせますよ。」
佐藤：「いや、そんなにすぐ直んないと思うんで。間違いめちゃくちゃあったんで。
どこが間違えてるかはちょっと教えられないんですけど。」
新垣：「なんで！？さっき、急ぎ直して提出してって言ってたじゃん！早く提出しないと
佐藤さんも困るでしょ！」
鈴木：「先輩！佐藤さんもこう言ってますし、AVのチェックは僕がやりますよ！
だから、先輩は申請書の直しに集中してください！」
新垣：「なんでだよ！どんだけ俺に見られたくないんだよ！俺が確認するのも、鈴木が
確認するのも一緒だろ！」
佐藤：「いや、全然違います！！鈴木さんにはもう見られてるんで！」
鈴木：「佐藤さん！？」
新垣：「鈴木さんにはもう見られてる…？」
鈴木：(茶化しながら)「佐藤さん？何言ってるんですか？あ、またボケか！そうですよね？」
佐藤：「いや、あの…、その…。実は、妹からAVに出たっていう話は聞いていたんです。
そのときに、鈴木さんも現場にいたってことを聞いていて…。」
新垣：「はぁ！？」
鈴木：「いやいやいや、佐藤さん？一旦、落ち着きましょう。ね？」
新垣：「あ！お前、このAVに自分も出てるって気が付いて、それがバレないように俺に
見せないようにしてたのか！？」
鈴木：(焦りながら)「そんなわけないじゃないですか！」

新垣：「え、じゃあ、このAV、佐藤さんと鈴木が出てるってこと？」
佐藤：「私の妹です！」
新垣：「もういいって！その嘘！諦めろよ！」
新垣、改めて、モニターでAVの確認をし始める。
佐藤：「いや、本当に私の妹なんです！」

鈴木、佐藤を連れて、新垣に聞こえないように距離を取る。
鈴木：「ちょっと、佐藤さんどういうつもりですか？なんか、僕だけ陥れようとしてます？
現場で会った時、これは絶対に誰にも言わないって約束しましたよね？」
佐藤：「約束？妹とそんな約束したんですか？私、そこまでは聞いてないんでちょっと
わかんないです。」
鈴木：「いや、もう無理ですってその嘘！先輩もあれは佐藤さんだって確信してますよ。」
佐藤：「鈴木さんが、ちゃんとカバーしてくれないからじゃないですか！
急に『AV出てます？』なんて聞かれたら、『双子の妹です。』としか言えないでしょ！」
鈴木：「僕のせいですか！？なんだよ『双子の妹です』って。もっとマシなごまかし方
あるでしょ！結構、カバーした方ですよ！なんかあと『テレパシー使える』とかも
言ってたな！？嘘すぎるって！あんなのカバーできるわけないだろ！
なんで嘘の上に、より強烈な嘘、塗りたくってるんだよ！？」
佐藤：「仕方ないでしょ！こっちだってバレないように必死だったんだから！」
鈴木：「自分がバレたからって、僕も巻き込もうとするのやめてくださいよ！
ずるいですよ！」

新垣：「あっ！！」
新垣、ノートパソコンを持って行きながら、鈴木と佐藤のところに向かう
新垣：（モニターを指さして）「これ、お前だろ？」
鈴木：「これは…。双子の弟ですね。」
新垣：「嘘つけ！！！！」

終